

上野千鶴子

『家父長制と資本制』

——マルクス主義フェミニズムの地平——

岩波書店 1990. 10 vii+330 ページ

1

まず、専ら経済学の手堅い専門書を書評の対象としてきた本誌から本書を書評するようにと依頼されて私は驚いた。率直に言って、社会科学の分野でも最近流行のエンターテイメント的要素の強い書物の代表とも言うべきこの書が、本誌の書評欄でとりあげられる性格のものかという疑問を持ったからである。

本書の出版当初、各紙誌は競ってこの書の書評を載せたが、その大方は絶賛か賛美であった。上野氏が、人が自分に何を要求しているかわかる頭の持ち主だと何かに書いていたのを想いだし、その読みがまさに当たったのだと、私はその時それらの書評に目を通していった。それから今日までの間に、私の知人たちも、本書に対して書評その他の形で言及し始めた。それらは、礼儀をわきまえ、ほどほどの疑問点と批判点を書き添えていた。私は、それらを読んで、上野氏への批判は書くだけ徒勞であろうと思った。上野氏は、本書のもととなる既発表の論稿に対してすでに、各論者から何点かの批判を受けていた。私もその一人であった。しかし、批判者のすべての論点にたいして、上野氏はそれをひとつも受け入れた形跡がない。本書理論編の終わりに配された「補論」がそのことを何よりよく示している。それどころか、そこではこれまでの批判はこの書のエンターテイメント性を高めるために適切な役をもたされて、利用されているか、無視されているかのどちらかである。従って、この「補論」に登場する人々はおうまじめに上野氏と向かい合うことを避けようとするであろう。批判に対して著者は極端に言えば「私はそう解釈しない」の一言で片づける。それでは、議論がかみあうはずがないし、それは科学的態度とはいえない。書評を書く段になって、私も本書を読みながら、当然批判点についてのたくさんのメモをとったが、その一つ一つを本稿に書く気はとうていしない。

しかしながら、この上野氏にあえて正面から向かい合った人がいる。水田珠枝氏である。『思想』1991年6月号の水田氏の書評は、本書の全面否定と受けとめられる。水田氏は、私にとってもかねてからの論敵であって、拙著も徹底的に批判されたことがある。ところが、今回の水田氏の上野批判には、私はほぼ同感であった。以上の点から、以下のことを、私は、著者に向かって書くのではなく、本誌の性格からして、主に、特にフェミニズムの免疫がない（あるいはフェミニズムに素朴な）男性経済学者の読者を念頭において書くことにする。

2

本書にたいするいくつかの書評の最後になるかもしれない本稿に、慣例のような本書の内容の紹介や要約の必要は全くなかろう。かつ、既述の理由から批判点を詳細に書くという書評のスタイルもとりたいくはない。単刀直入に、私の本書に対する感想を書くことにとどめたい。

まず第1に、著者の論法の特徴は本書に限らず、他の著書についてもいえる事だが、対象の分析に当たって、さまざまな複雑な要素の捨象、著者の関心・読者受けする要素への単純化の技術にある。このことが、前述の、一切の自己への批判を一つでも聞き入れるどころか、戯画化してみせるか、無視するかにつながっていく。一例だけあげよう。上野氏はいう。「フェミニズムの(主要な敵)は、男性であることを私は公言してはばからない。男との敵対を避けたいエセフェミニストの女や、女性との対決を避けることでフェミニズムの問題を無化したい反フェミニストの男だけが(男と女は共通の敵に共闘できる)と無邪気に信じたがる」(p. 157)。

この文の解釈には本当は何頁をも要するのだが、この単純化こそが受けるのである。

第2の特徴として、著者本来の出自と思われる構造主義に起因する用語・造語、巧みな言い回しによって、従来からの理論を言い替え、読者に新鮮な印象(錯覚)を与える手法をあげたい。巧みな言い替えは、実は、読者を面白がらせ、また、まれには、読者に、従来の異なる理論体系における難解と思われるタームにたいする皮相な理解を助けることになるかもしれないが、そのことは、概念や理論体系を深める事とは全く関係がないのである。

第3は、読者・あるいは対談の相手(結局はそれを読む読者層)を手際よく分析し、巧みに、それにあ

わせる術をよくわきまえた明晰な頭脳の持ち主であるという事である。これは、最近とみに要求されるようになってきた研究者におけるタレント性、パフォーマンス性を無理なく身につけ、マスコミにも乗り、しかも学会レベルでもひけをとることのない、特に女性には新しいタイプのエンターテイナーということになる。本書刊行の約3ヶ月前、1990年7月発行の唯物論研究協会の機関誌『思想と現代』での、哲学者古茂田宏氏との対談「フェミニズムとマテリアリズム」を読んで私はますますその感を強くした。古茂田氏をして、上野氏を「オーソドックスなマルクス主義者」「元氣なマルクス主義者」といわざるを得なくしている(たとえアイロニーとしても)が、それがその一例である。

第4に、ところで上野氏は、はたして「マルクス主義フェミニスト」なのであろうか。私の結論は、「？」である。氏はマルクス主義でない事は言うに及ばず、フェミニストであるかどうかとも不可解である。

わが国では欧米のマルクス主義フェミニズムの紹介者は上野氏に先駆けて複数いた。しかし、紹介したからといってその人々は、マルクス主義フェミニストとはいえない。私はわが国には上野氏も含めて欧米のようなオリジナリティをもったマルクス主義フェミニストというべき人はまだいないのではないかと思う。大体、わが国のように、他国と異なって、マルクス主義研究が男女の研究者によって精緻になされていた国では、フェミニズムからの批判を容易に受け付けられない雰囲気がある。上野氏が理論編で百数十ページにわたって、マルクスが扱ったの扱わなかったのと欧米のマルクス主義フェミニストの言説をふんだんに用いている抽象事は、わが国では、きわめて私の領域と近い所で、フェミニスト視点とわざわざ銘打たなくてもかなり深く具体的に扱われていたのである。それはマスコミに乗らなっただけであり、マスコミに乗った上野氏のもっともらしい指摘を読んで「今更何を」と思う研究者も多いのである。マルクス主義の理論を応用して何十年にもわたっての、再生産領域の科学=家政学や生活科学の中でのわが国での蓄積は上野氏にとっては勿論関心の外にある。

本誌の読者の中には、マルクスを読んではいるが、それをフェミニスト視点で読むなどという事を考えた事のない人、また、一般の読者の中ではフェミニズムには関心があるが、資本論など一度も読んだ事

がなく、上野氏による欧米のマルクス主義フェミニストの引用や上野氏の解釈で、マルクス主義とはそういうものだったのかと思う者がいるだろう。前者の人々は、マルクス主義が、フェミニズムよりはるかに多面的な、人間のすべての問題をカバーしていたことも忘れて上野氏による欧米の新情報に感心する。後者の人々に、今更、資本論を読んで比較してみてほしいといっても当面は間に合わない。しかし、資本論の上野流の読みのように欧米マルクス主義フェミニズムも上野流に読みとっているとしたら注意を要することである。

3

理論編の7つの章構成はどういう理論で配列されているのか。これが、上野マルクス主義フェミニズムのすべてなのか。それとも西欧の諸論者の紹介の再編成なのか。これらの章に散見される氏の見解はマルクス主義とは縁もゆかりもないものが多い。マルクスの用語を寸借して似て非なる内容に改竄していく才能には舌をまく。氏は本書の内容を『思想の科学』に連載時代はマルクス主義フェミニズムに「さよならをいう」ために書き「マルクス主義フェミニズムを超えて」どこかに行くはずではなかったのか。本書では、その気配はみられない。氏が、マルクス主義フェミニズムなるものに居座るとはどうてい私には思えないのだが、本書ではとにかく居座っている。まだ、利用しつくしていない何かがあるのであろう。

分析編の6つの章の内、第8章から11章までは退屈である。今まで、女性労働論の専門家が言い古した事を、上野氏の用語で置き換えて読者に新しい印象を与えたと過ぎない。同じ内容でも、上野言葉で書けば新しく読み取れる読者へのサービスのページとして私ものがまんして付き合った。12、13章については別の問題があるが紙幅が足りない。

今、ソ連・東欧のあちらこちらで、レーニン像が倒されているが、本書は、マルクスの像を倒して、その上でハートマン、コスタ、バレット、デルフイ等々という名入りのTシャツをきて、ベジャールに似た振り付けで、踊りを踊って観衆を知的に楽しませているエンターテイナーを連想させる。舞台の下では浅田彰氏らが楽しげにしている。「この観衆はものにした。どう私の冴えは」と著者は満足げである。しかし、どうしたことか、金井淑子氏と江原由美子氏は、やおら腰をあげて去って行った。

本書は、ある種の読み手を楽しませ、セックス・ブラインドだった社会学者には少しは刺激を与えている本である。それが十分に計算されている才能には私も拍手を送りたい。

[伊藤セツ]